

内藤慎介著「大河ドラマ『八重の桜』が伝えるもの」記念講演『第 36 回経済同友会 東北ブロック会議—復興への道—報告書』2012 年 10 月 25 日実施を読む

大河ドラマ『八重の桜』が伝えるもの

1. 福島、東北との不思議な縁

(1) 私は元々、福島や東北に不思議な縁があります。2007 年に東北・岩手を舞台に「どんど晴れ」という朝ドラを製作し、2009 年には「天地人」という大河ドラマで福島 みなさんに大変お世話になりました。昨年、2011 年も「どんど晴れ」スペシャル版製作のため岩手ロケに参加していたのですが、3.11 に出くわしたのはまさにその最中のことです。あまりに甚大な災害だということで制作は中止となったのですが、その決定の後、ロケ中お世話になったみなさんから「放送を何とか出来ないものか」と多くのお便りを頂きました。岩手でまたロケをするということは不可能だったのですが、みなさんの想いに応えないわけにはいかないということで、出演者、スタッフと話し合い、台本を書き換え、撮影方法を変え、何とか制作を再開して放送にこぎつけました。放送後、岩手を初めとする東北にお礼を兼ねて伺った際、みなさんには大変喜んで頂きました。「元気をもらった」とのお言葉は今も残っています。

(2) 大河ドラマのプロジェクトは大体、放送の 3 年位前からスタートします。今回の立ち上げの段階、つまり震災以前の時点では「どのようなドラマがみなさんに見えていただけるか」を漠然と考えていました。しかし、震災の被害を目の当たりにし、日々届くニュース、映像を見ながら、私の中で「ドラマとして何か出来るだろうか」と考えるようになりました。傷付いても前を向く強い志、人と人とをつなぐ思いやりの絆——震災直後、海外メディアからも称賛された日本人の美德ですが、こうした心は一体どこから来ているのか。私の関心は、次第にそうしたところへ向かっていきました。そして、2013 年大河ドラマ『八重の桜』というプロジェクトが動き始めたのです。

2. 「必ず光は見えてくる」

(1) 東北で取材をしている中で一番衝撃的だった言葉は「震災が来る前に、既に東北は終わっていた」というものです。「農業は自由化になり、工業品製造はもう海外に行っていて、お父さんはやる気を無くしていた」。ところが震災が起こり、そんなお父さんたちが子供たちのために「何かしたい」と思って立ち上がった。その背中を見た子供たちも、目を輝かせ頑張ろうという気になっている——そんなお話を伺いながら、私は、『八重の桜』に込めたいメッセージを膨らませて行きました。

(2) 『八重の桜』の主人公・新島八重は、幕末に敗戦を喫した会津の出身です。一旦は賊軍の烙印を押され、故郷を追われ、絶望の淵に立たされた人です。会津と言うと、これまでの大河ドラマ、特に『篤姫』『龍馬伝』など、勝った方から幕末を描く作品の中では「悪者」というイ

メージになりがちですが、調べてみると実は大変誠実で、行動にも筋が通っている。「ならぬことはならぬ」、つまり、「やってはいけないことはやってはいけないし、たとえ負けると分かっている、やらなきゃいけないこともある」という精神を貫いた人たちだったのです。「自分たちは悪いことはしていない。50年、100年経っても自分たちは間違っていないということを後の時代に残せ」という姿勢で凜と生きたがために、彼らは明治新政府の中で次々と蘇り、その後の日本をリードしていく存在にまでなっていたわけです。

(3)「夢を持って前に進めば必ず光は見えてくる」。これはもしかすると、八重の時代から東北のみなさんが持ち続けている精神なのかもしれないと思います。絶望を経た八重たちの再生、そしてその後の活躍は、「誠実に生きる人間を歴史は絶対に裏切らない」ということを証明しています。ドラマを通じて一番伝えたいのは、そうしたメッセージです。

(4)また、会津人たちの復活の背景には、多くの人たちの助力がありました。その人の輪の広がり、不思議な奇跡に満ちています。それもドラマの見どころの一つなのですが、制作の現場においても、それを地でいくような出会いに恵まれています。不思議と人が寄って来てくれるのです。原作もないのに、少しお話をしただけで、出演者のみなさんも「全体での役回りは、よく分からないけどやってみたい」と応えて下さいました。そんな人と人とのつながりを、皆様と一緒に広げていければいいなと思います。

3. 「祭り」を起こしたい

(1)大河ドラマは、良くも悪くも多くの人に注目されます。福島や東北を舞台にすれば、視聴者のみなさんが福島や東北を意識するようになるということです。そこが大切だと思っています。

(2)このドラマで、私は「祭り」を起こしたいと思っています。ドラマをきっかけに東北を訪れたり、あるいは、ただ思ったりするだけでもいい。ドラマを見て下さる方々の気持ちが一つにつながれば、福島、東北を元気にするための弾みとなります。「復興支援」という言葉を使うと大袈裟ですが、本当の復興とは、私たちのそんな小さな行動から始まるのではないかと思います。

4. 桜に込めた未来への希望

(1)ところで、なぜ「桜」なのか。桜の木というものは、花が散った瞬間から、翌年さらに綺麗に咲くための準備を始めるそうなんです。激動の中に散るだけではなく、苦しみを乗り越え、たくましく、しなやかに、また花を咲かせる——その美学は八重の生き様と重なりますし、震災に傷付いた今の我々日本人の背中を押してくれる力のようにも感じます。そんなことから、ドラマを固めていくうちに、「桜」のモチーフは外せないものとなっていたのです。

(2)一部紹介されていますが、今年3月、主役の綾瀬はるかさんと一緒に福島県を訪ねた時に桜を持参しました。林野庁で10年かけて作っていた新種の桜です。その桜にまだ名前が付いていなかったこともあり、12月24日に開催される「ふくしま大交流フェア」では佐藤知事と

綾瀬さんで命名式を行うことになりました。その桜が来年以降、全国、全世界に向けて「福島、東北は元気ですよ」というメッセージになればいいなと思っています。

(3)この桜のプロジェクトもそうですが、『八重の桜』というドラマをきっかけとして、多くの人が色々な形で「何かが出来ないだろうか」と動き出し、大きなムーブメントが起こり始めています。私どもの力だけでは大きなことはできませんが、せっかくこういうご縁があったので、経済同友会のみなさんも一緒になって『八重の桜』を盛り上げていただければ、東北に対して多くのことができるような気がします。

(4)私どもの番組は来年1年で終わりますが、桜は永遠に増えていきます。桜は10年経つと花が咲き、20年経つと普通の木になるそうです。その時に、先ほどの映像の中の子供たちが書いた「10年後のメッセージ」がどのようになっているのか。大人はやはりそれを支えてあげなくてはならないと思います。

(5)子供たちはとても前向きで、「立派な農家になりたい」「警察官になって福島の人を守りたい」と真面目に書いていました。この子供たちは本当に一生懸命やっているなと思って、見ていだけで涙が出そうになりました。東北は「終わった」のではない。これから「始まる」んだ——子どもたちの目の輝きを見て、私はそう確信しました。

(5)そのようなことを考え始めてから、私自身、ドラマだけが当たれば良いということとは少し違うベクトルに関心が移っていったような気がします。出演者も同じ気持ちのようで、「今度福島で何かやるのだけど」と言うと、意外と手を挙げてくれます。俳優さんたちはどちらかというとそのようなことは苦手なはずなのですが、「行かない」とは言いません。「何かあるなら連れて行って下さい」という感じです。それは多分、自分の損得ではないところで、やらなければいけないのだろうな、この国の未来や夢を考えていかないといけないのだろうな、と感じているからだと思います。

5. 繋がりに感謝

(1)このドラマの制作発表を行ったのは、東日本大震災の後、6月初めのことでした。大震災からまだ数ヵ月しか経たない中で福島に行っていきなり「大河ドラマをやろうと思うのですが」と言ったら大変なことになると思い、実は一度も福島を訪れない状態で制作発表をすることになったのです。どんな反応があるかと心配していたのですが、偶然にも私の先輩・松平保久さんが松平家の十四代当主だったのです。これも先程言った「不思議な繋がり」だなあと思うのですが、その方はいわば、今の“お殿様”な訳ですよ。そこでお殿様に「大丈夫でしょうか」と尋ねたのですが、「福島の方は皆さん喜ぶでしょう、私が一命に代えても守ります」と言っていただき、それで自信を持ちました。

(2)また、今回の大河ドラマには福島出身の役者さんにも多数ご参加いただいています。みなさん「どんな役でもいいから、少しでも参加したい」という熱い思いをお持ちの方です。

(3)松平容保が京都守護職に就任する際、周囲の人間は止めました。それは会津藩の存亡にも関

わりかねない、渦中の栗を拾うようなものだったからです。しかし、「200 年を超えて会津があるのは徳川があつてのこと」と、容保は京都に向かいました。止めようとした人間、西郷頼母を西田敏行さん、田中土佐を佐藤 B 作さんという福島出身のお二人が演じています。この間、撮影したのですが、そのシーンには普通とは違う気迫が感じられました。ドラマ上だけではなく、これからの福島をどうするのかという思いが込められているようにも見え、役を超えた化学反応が起こっていました。

- (4) 撮影をしていると、いろんなことが起こります。会津でロケしようと思っていたら、去年偶然にも当時の瓦になっていたとか。明日、みなさん行かれるとのことですが、鶴ヶ城の瓦の色が去年全部ちょっと赤っぽい色になって当時の瓦が再現されていました。普段ならそこで違っているはずなのに、そこに偶然色々なものが重なってきている。何かそうしたところにも、このドラマには不思議な巡り合わせのようなものが作用している気がします。

6. 視点を変えて歴史を見る

- (1) 綾瀬はるかさんが演じる八重は七連発銃を持っていました。七連発銃と言ってもよく分からないと思いますが、カウボーイが撃っているような銃をカシャーン、パーン、カシャーン、パーンと撃っているのです。そのような女の子が会津にいたのです。そして、その子はずっと男の中で学びながらも、「ならぬことはならぬ」と言って戦い、そして会津が負けると自分も男として死のうとします。その後、今度はお兄さんのいる京都に行き、そこからは自分の人生を銃から語学に変え、そこで新しい展開を見せていきます。

京都には八重のお兄さんで、覚馬さんという人がいます。これもまた今回フューチャーされたいと思いますが、「管見」というものを書いています。この人は戊辰戦争の敗戦で薩摩の牢の中に居て、目が見えなくなっているのにもかかわらず、その後の国のことを思って憲法を書いているのです。それが「管見」というもので、それをベースに明治憲法ができています。

- (2) そういうことはあまり世の中で知られていませんが、その時の彼の潔さは感嘆に値します。西郷隆盛、岩倉具視はそれを見て、「こんなに優秀な人間がいるのなら新しい明治政府に連れて行きたい」と言ったそうですが、覚馬は行きませんでした。会津が無くなり、捨てられた都である京都を世界一の都市にしてやりたいと思って、彼は残るのです。

- (3) 大河ドラマというのは、ただ史実だけを追いかけるのではなく、当然そこには脚色があります。「これだけが正解」というのではなく、いろいろな角度から、これまでにはなかった価値観に焦点を当てていくということになります。『八重の桜』は「勝ち負け」で言えば「負けた側」の物語ですが、だからと言ってそれが間違っているわけではない。手前のものだけではなく、将来を見据えた中で、やるべきことをやらねばならない——そのように考えた人たちがいたということを、そんな生き方もあったということを、ぜひ子供さんも一緒に見ていただければと思っています。そして、「誠実さの中にいると、必ず報われる」というメッセージを、私たち大人から子供たちにしっかりと発信していければと思います。

7. 最後に

「八重の桜」というタイトルの字が細いのですが、あれは題字を担当した赤松陽構造さんが八重と「凜として折れない枝」のイメージを重ね合わせて、竹の筆で題字を書いています。桜は一卵性の樹木と言います。恵まれた環境にあらうとも、過酷な環境にあらうとも、同じ株から分かれた木々は、持って生まれた絆のもと、皆同じ春の日に一斉に満開の花を咲かせます。本ドラマに集まったキャストのみなさんも「福島、東北、そして日本を元気にしたい」という同じ志を持つ方ばかり。人と人との絆を大切に桜のように強い結び付きをもって一丸となり、「八重の桜」で鮮やかな花を咲かせます。どうかお楽しみ下さい。そして、皆さんも一緒に絆を大切に前に進みましょう。

P55 ～ 59

[コメント]

2012 年 10 月 25 日に福島市の福島ビューホテルで行われた経済同友会 東北ブロック(宮城・岩手・青森・秋田・山形・新潟・福島の 7 県)会議―復興への道―の記念講演として内藤慎介・NHK プロデューサーが話された内容は、聞く者すべての胸を打つものだった。2011 年 3 月 11 日の大震災から 2 年を経た今日、東北のため、とりわけ福島のために福島の方々と手をたずさえて何ができるかを自分のこととして考えたい。そのよいきっかけとなる講演と考える。

― 2013 年 3 月 11 日 林 明夫記 ―